

## 土木計画学における事実と価値

東北工業大学 正会員 泊 尚志

### 1. はじめに

本稿は、「土木計画・学」を改めて「政策学」の領域として捉える<sup>1)</sup>という議論に際して、この領域で求められる各種の「解」に相当するものが、事実と価値の観点からどのように理解されるべきものかという非常に基礎的なかついわば当然の議論について改めて取り上げることにより、講演時に二、三の簡単な論点を提示することをねらいとしたものである。本稿のタイトルが、その内容に対して非常に大風呂敷を広げたものになっているばかりか雑駁な内容となっているが、セッション参加者および読み手の皆様にご容赦いただきたい。

### 2. 土木計画学におけるエビデンスとしての事実

土木計画学が発展してきた経緯の中で、その科学的な性質を保証することが先行的に重視されてきたことが指摘されている<sup>2)</sup>。ここでいう科学的な性質とは、最適化や計画数学に代表される数学的な側面を意味する。こうした土木計画学における数学的な領域の発展が、従来社会に大いに貢献してきていることは言うまでもない。その一方で実践的な目的の薄れた理論研究の発展がみられ、土木計画学における学問と社会における実践との間に大きな乖離を生じているのではないかということが先の指摘の主旨である。

ここで、あくまでも土木計画学が実践を志向しているという前提の下で、数学的な領域における解に最も求められるものは当然ながら客観性である。特に政策的な議論においたとえばEBPMが重視されている中では、このような解は定量的、客観的な“evidence”として用いられることになる。「科学的根拠」とも呼ばれる。こうした根拠は、課題の構造が数学的問題に一致させられる場合には、客観的かつ理想的なものとなり、極めて有用な性質を帯びる。しかしながら、実際には課題の構造を数学的な問題に置き換える際に、やむを得ずそぎ落とされる要素がしばしばある。そのような条件下では、先のような解は局所的なものとなる。

これに加えて、このような根拠は、最適解であれ均衡解であれ、政策的には「最善策」を求めるものである。

### 3. 土木計画学における社会的な選択基準としての価値

一方、政策的議論においてはこうした「最善策」を問うことは必ずしも重要ではないという指摘がある。ウルフ<sup>3)</sup>は、バーナード・ウィリアムズによる「少なくとも応用的な道徳・政治哲学に関する限り、重要な問いというのは、『最善の社会の姿とはどのようなものか』ではなく、むしろ『いま現在から出発して、われわれがたどり着ける最善の社会の姿とはどのようなものか』なのである」という指摘を踏まえつつ、「いまだここにいるのかの理解」の必要性と、それに基づいて「包括的に状況を理解」することの重要性を主張している。

あるいは、たとえばウェーバー<sup>4)</sup>は次のようにいう：

「ある問題が、社会的にみて政策的な性格をそなえているということの標識は、まさしく、当の問題が、既定の目的からの技術的考量に基づいて解決されるようなものではなく、問題が一般的な文化問題の領域に入り込んでいるために、ほかならぬ統制的価値基準そのものが争われうるし、争われざるをえない、というところにある。」

---

キーワード 土木計画・学, 政策学, 科学的事実認識, 実践的価値判断

連絡先 〒982-8577 仙台市太白区八木山香澄町 35-1 東北工業大学工学部都市マネジメント学科 TEL 022-305-3533

ウェーバーも科学の権能として「手段の適合度の検証」と「随伴結果の予測」、換言すると「目的達成とその犠牲との相互秤量に必要な知的判断材料の提供」を挙げている。しかしウェーバーの主張はむしろ、そうであっても手段の適合道の検証や随伴結果の予測からただちにその手段を採用すべきかどうかという当為判断が導き出されるわけではないことにある。一方、科学の権能として、これらのほかに「目的の根底にある理念の解明」および「首尾一貫性を規準とする理念一目的連関の形式論理的批判」を挙げている。これらはいわゆる規範科学に含まれる。

このような議論に照らすと、土木計画学があくまでも実践を志向しているとするならば、土木計画学に問われていることは、ある課題に対して手段として最適な解を求めることと、それだけではなく目的として適切に選択すべき価値を求めることにある。

#### 4. 科学的事実認識と実践的価値判断をつなぐ

土木計画学に求められていることは、所与の(数学的な)問題や狭義の技術的な課題に対して科学的な解を求めるといういわば科学的事実認識的な側面と、政策的な課題に対して包括的な状況の理解に基づいて解を見出すといういわば実践的価値判断的な側面の両面を発展させることであり、それらの両側面を「つなぐ」ことではないかと考える。これは言い換えるなら、自然科学的議論と社会科学的議論、規範科学的議論の交差、または「理論知」と「現場知」<sup>5)</sup>の融合、あるいは客観的アプローチと主観的アプローチ、間主観アプローチの結びつきであり、このような多様な観点から議論が活性化することに対して貢献していきたいと考える。

#### 5. おわりに

以上につき、セッション参加者各位より多くのご批判を賜れると幸いである。

#### 参考文献

- 1) 藤井聡：土木計画学＝土木政策学による防災・強靱化への貢献について，土木学会全国大会第74回年次学術講演会，IV-68，2019.
- 2) 土木学会土木計画学研究委員会，シンポジウム資料，土木計画学とは何か？—そのアイデンティティと今後の発展を考える—，2020.
- 3) ジョナサン・ウルフ（著），大澤津，原田健二郎（訳）：「正しい政策」がないならどうすべきか—政策のための哲学—，勁草書房，2016.
- 4) マックス・ウェーバー（著），富永祐治，立野保男（訳），折原浩（補訳）：社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」，岩波文庫，1998.
- 5) 秋吉貴雄（著）：入門 公共政策学—社会問題を解決する「新しい知」，中公新書，2017.